

声明文

私たちは命が生き呼吸する健康な4大河川を見ることを望んでいる。

CBD韓国市民ネットワークと韓国湿地NGOネットワーク、そしてラムサールネットワーク日本などがともに行った4大河川韓日市民共同視察団は、9月21日から23日まで4大河川事業の工事現場の調査を行った。そして、4大河川事業後、川に表れてきた変化を確認することができた。

市民たちが信頼して飲まなければならない水源には毒性のあるアオコが大量発生し水質は悪化した。生物多様性の宝庫である多くの湿地が消え、絶滅危機の動植物は、生息地を失い、個体数が急激に減少していた。急激に変わった河川環境は、大規模な魚の弊死につながり、高くなった地下水によって河川周辺の農民たちの被害も発生していた。また、漢江の川辺の有機農民たちが生活の基盤を離れる条件として政府が約束したトゥムルモリの生態学習場も現在、膠着状態に陥っていることを確認した。

2009年、4大河川事業がスタートする時から韓国と日本の専門家と環境団体は、4大河川事業に深い憂慮を持ち、現場調査を実施したことがある。4大河川事業がすでに日本で経験した誤った河川整備を繰り返すことになりかねないことを予見したことがある。そして、2014年、4大河川工事が完了した後、予見したことが現実となった今、私たち韓日共同調査団は、深い憂慮を隠せない。大韓民国政府が約束した生命の源泉として生まれ変わった4大河川は、探して見ることができず、流れなくて死んでいく川が残っているだけだ。

4大河川事業は河川の復元ではなく、河川の破壊事業だったことを、死んで行く4大河川が証明している。これは、河川の再自然化を議論しなければならない時期であるにもかかわらず、4大河川事業がまだ終わっていない洛東江第1の支流である内城川(ネソンチョン)で、最後に残った4大河川事業のヨンジュダム建設が進められていることが示している。内城川(ネソンチョン)は韓国の典型的な自然河川の姿を保ったところであり、各種の野生動植物が生息する生態系の宝庫だ。

また、4大河川の一つである洛東江(ナクトンガン)の砂の半分以上を供給する所で、4大河川の再自然化のためには内城川(ネソンチョン)からの砂の供給が不可欠である。しかし、ここに栄州(ヨンジュ)ダムが建設され、砂の供給が途絶えることになる危機に直面している。

今、河川管理のパラダイムの世界的な傾向は、人間の利用を超えた生態系の観点からの'復元'である。そのような意味で、4大河川事業は世界的な流れに逆行する旧時代的な発想である。全地球的に環境破壊と気候変化が加速化されている時代の中で、韓国は国家の境界線を越え、地球の自然を守るために共に努力しなければならない。4大河川は私たち皆の川であり、世界市民が共に大切にしなければならない自然遺産だ。自然の未来は人類の未来だ。4大河川の未来はすぐ私たち皆の未来であり、4大河川の生命は、我々みな生命だ。

第12回生物多様性条約締約国会議が2014年秋、韓国の平昌(ピョンチャン)で開催される。韓国をはじめ、全世界のすべての国は生物多様性条約の当事国として愛知ターゲットを誠実に履行して、多様な生物が調和して暮らしている健康な生態系を作るため、努力しなければならない義務がある。私たちは韓国が生物多様性条約締約国会議の開催国としての責務を果たされる第一歩が4大河川の再自然化にあることを指摘したい。

4大河川を流れるようにしよう。川は流れなければならない。死んで行く4大河川に住んでいるすべての生命たちが川が流れようと言っている。韓国に先立って、再自然化を進めている多くの国で、生命が生きて呼吸する健康な川を取り戻すことができた。まだ遅くない。まず、4大河川事業の目的や妥当性に対する検証が必要だ。そして現時点で直ちに施行できる水門開放を実現することだ。とくに、榮州(ヨンジュ)ダム建設を中断して、内城川(ネソンチョン)を活かすことができる代案を模索しなければならない。これが再自然化の第一歩だ。かつて河川開発でダムがどのように川を壊し生態系を破壊するのかについて学んだ多くの国々の経験を教訓として、韓国の河川が再び自然の姿で回復することを希望する。

2014年9月24日

4大河川日韓市民共同視察団